

短歌を知るために 久永草太

・フクロウが鳴くと明日は晴れるので洗濯物を干せという意味
偶然短歌ボーウイキペディア日本語版「フクロウ」より
さて「偶然短歌」の出現や、偶然短歌より短歌っぽくない短歌

が溢れる現代歌壇において、「短歌」が何をもつて短歌であるか
を言うのは難しい。我々が動物の性質調べるために解剖を行う
ように、「短歌」がどういう性質のものであるかを知るには「評
論」という方法でもって切り刻んでいく必要がある。短歌研究
二〇一二年十月号発表の「第四十回現代短歌評論賞」受賞二作は、
桑原憂太郎と高良真美による「口語短歌」についての解剖であつた。
桑原の論は「口語で発想した事柄を、短歌定型になじませよう
とあれこれ試行した結果」、過去完了の助動詞「た」の代替として
①動詞の終止形（ル形）、②終助詞（～ぜ、～ね、など）、③モ
ダリティの活用、という三つの用法がうまれたというものである。
・あの青い電車にもしもぶつかればはね飛ばされたりするんだろ
うな

永井祐『日本の中でたのしく暮らす』

桑原は右の歌を例にとり、「はね飛ばされる」という命題に「た
りするんだろうな」という〈主体〉の判断や態度である「モダリ
ティ」がくつづいている」としたうえで、調べが独特なうねりを
醸し出している、と述べている。これを踏まえて、

・でも成績いいんだしさと言わるとそのときはまあ確かに
て
・ケチャップが自立できなくなるようなタイミングがやがてくる
だらう

第六十八回角川短歌賞次席 福山ろか 「さえぎりに気づく」
こういった歌を見ると、韻律を整えるだけだと思っていた言い
回しが、実は「モダリティ」として主体の解像度を上げていたこ
とに気づく。モダリティ、かなり興味深い。

高良の論は「口語短歌は書かれた時点ですでに口語ではない」
という痛快な一文から展開する。明治期の普通文であつた文語と
言文一致体としての口語の逆転の時期があつたこと、言文一致運
動のなかで「東京の話し言葉」は書き言葉として地方に広まり話
す身体を統制したこと、そのような国語による口語短歌の試みに
抵抗した茂吉は東北出身であつたことなどの事例を上げ、「口語
／文語とはそもそも何なのか」という点を詳細に解剖してくれて
いる。要約しようと思ったがあまりに無謀な重厚さなので、ぜひ
本文を読まれたい。

これら評論は短歌を「内側から」解剖するものであるが、「外
側から」のアプローチによる試みにも目を見張るものがある。文
藝春秋二〇一二年十二月号で「短歌A-I」に関する自身の仕事に
ついて執筆している。朝日新聞の企画で作ったA-Iは「揺れてい
る光の中で」に「見る夢は「過去の出来事」あるいは想起」と
付け句してくれる。外側から「短歌っぽいもの」を作り、似せて
いく試行錯誤もまた、短歌を短歌たらしめる要素を論じる上で貴
重なデータをもたらしてくれるだらう。